

論文

唐代瘟神「五帝」考

——御霊信仰の源流——

山口 建 治

YAMAGUCHI Kenji

はじめに

中国民間の瘟神信仰とその儀礼が、六・七世紀ころに形成され、古代のわが列島にも伝わり、オニ（鬼）という日本語が生まれたというのが、筆者の年来の主張である。前号において筆者は、そうした仮説に基づき、「瘟神の形成と日本におけるその波紋」と題する小論を発表し、日本古代の怨霊・御霊の信仰は、まさしく列島に伝わった瘟神信仰の一変異であろうと指摘した⁽¹⁾。前論文を引き継ぐこの小論では、南北朝より唐代にかけて、瘟神の観念がどのように形成されたのかを道書や仏書に基づきより具体的に跡づけるとともに、管見の範囲、日本において「御霊」の語が初めて現れる、最澄の『長講金光明経会式』『長講仁王般若経会式』の「御霊」とそれがどのように関連するかについて、私見を述べてみたい。

飯泉健司は御霊信仰の研究史をふりかえり、以下のように述べている。「朝廷が御霊会を営む以前、民間で類似の御霊会が既に成立していたことは、今日ではほぼ通説化している」、「発生段階で祖霊信仰との関係の有無を問題にする議論がある」一方、「民間信仰としてのゴリョウ信仰」つまり「疫病害虫早魃など烈しい霊の祟りを恐れる信仰」として御霊信仰を捉える大島建彦のような説があることを紹介し、御霊信仰と「祖霊信仰との関係が明確に示された上代文献資料が見当たらず」以上、「祖霊信仰とは異質な信仰形態として御霊信仰を捉える方が穏やかであろう」と指摘する。そしてその淵源を国内に求めるものがある一方、外来の信仰と関連づける見解もあるとして、怨霊を祭る漢神に由来するという佐伯有清の説や伯有の怨霊故事に由来するという藪田嘉一郎の説を紹介している⁽²⁾。

筆者の立場も、御霊信仰の淵源を中国の民間信仰に求めようとするものだが、ただこれまでの研究と異なるのは、日中双方の民間語彙とその漢字表記に着目する点である。従来の研究は、文献上の漢語の意味を漢字の字義に頼って理解しその音声の側面を疎かにしている、と筆者には思えてならない。民衆の文化は声の文化である。文献記録を読む場合でも、どう読まれたか、そのことばがどう発せられたかを常に頭に入れておかねばならない。用いられる漢字の字義に頼るだけでなく、当て字の可能性を常に念頭に置くということである。音声としてのことばを重視することで、今やミッシングリンクとなった民間文化の伝播経路や脈絡を浮かびあがらせ顕在化させられるのではないかとつねづね考えてきた。小論はそういう意図に基づきゴリョウ信仰の由来をオニの語源問題と関連づけ解き明かそうとした試論である。なお今回も種々のインターネット上のデータベースを利用した

が、その主なものは、仏典の検索では東京大学「大正新脩大藏經」2012年版、その他の漢籍の検索は、「凡人大伝殆知閣蔵書」を使⁽³⁾った。

一 五瘟神の形成

瘟神とは瘟疫をまき散らす凶神であるが、古代からこの名があったわけではない。疫鬼・瘟（温）鬼の観念は早くから諸種の文献に見出され、また疫神も漢の蔡邕『獨斷』にでるが、瘟神の語自体は宋代以降普遍的になるようだ。民間信仰のことであるから、瘟神信仰がいつからどのようにして生まれたかはいささか判然としないところがある。清末の葉德輝が明代刊本に基づき重刻した『三教源流搜神大全』「五瘟使者」の条には、以下のように記載されている。

隋の文帝開皇十一年六月、内裏の上空十数メートルの高さに五人の力士が現れた。身には五色の袍をはおり、それぞれが一物を持っている。ひとは杓子と缶、ひとは皮袋と劍、ひとは扇、ひとは槌、ひとは火壺を持っている。帝が太史の張居仁に尋ねた。「これは何の神か。どういう災福を担当するのか」。張居仁が申し上げるに、「これは五方力士で天上では五鬼、地上では五瘟であり、五瘟（使者）といいます。春瘟は張元伯、夏瘟は劉元達、秋瘟は趙公明、冬瘟は鍾仕貴、総管の中瘟は史文業です。もしこれが現れると国民に瘟疫の疾を起すのをつかさどります。これは天がはやらせる時病なのです」。帝が「どうすればこれを治し免れることができるのか」というと、張居仁は「この病気をはやらせるのは天が疾を降しているのであり、治しようがありません」といった。そこでその年は国人で病死するものがはなはだ多かった。この時、帝は祠を立て、六月二十七日に詔して五方力士を將軍に封じた。青袍力士は顯聖將軍に封じ、紅袍力士は顯応將軍に封じ、白袍力士は感応將軍に封じ、黒袍力士は感成將軍に封じ、黄袍力士は感威將軍に封じた。隋唐は五月五日をもってこれを祭り、後、匡阜真人が旅次この祠にたちより五瘟神を降伏させ部將とした。（昔隋文帝開皇十一年六月、内有五力士現於凌空三五丈、於身披五色袍、格執一物、一人執杓子并缶子、一人執皮袋并劍、一人執扇、一人執槌、一人執火壺。帝問太史居仁曰、此何神主何災福也。張居仁奏曰、此是五方力士、在天上為五鬼、在地為五瘟、名曰五瘟、春瘟張元伯、夏瘟劉元達、秋瘟趙公明、冬瘟鍾仕貴、総管中瘟史文業。如現之者、主国民有瘟疫之疾。此為天行時病也。帝曰何以治之、而得免矣。張居仁曰、此行病者、乃天之降疾、無法而治之。於是其年、国人病死者甚衆。是時帝乃立祠。於六月二十七日、詔封五方力士為將軍。青袍力士封為顯聖將軍、紅袍力士封為顯応將軍、白袍力士封為感応將軍、黒袍力士封為感成將軍、黄袍力士封為感威將軍。隋唐皆用五月五日祭之。後匡阜真人遊至此祠、即収伏五瘟神為部將也。）⁽⁴⁾

文中の「在地為五瘟、名曰五瘟」は衍文かあるいは後ろの五瘟のあとに「使者」が脱落している可能性がある。元刊の『三教源流搜神大全』には「名曰五瘟使者」とあるからである⁽⁵⁾。儒・道・仏それぞれの影響のもとに五瘟神が形成された過程が、この文に凝縮されている。いまそれを解きほぐすことは容易ではないが、五鬼・五瘟・五方力士などの語に着目しつつ、その形成過程を可能なかぎりたどってみたい。

二 五厲・五鬼・五瘟（温）・五帝

『礼記・祭法』に、王には七祀、諸侯には五祀、大夫には三祀があり、その位階に応じてそれぞれ泰厲、公厲、族厲という、崇り神を祀る祭祀があることを記しているが、その注文に引く『春秋左氏伝』に、「鬼歸する所あれば、乃ち厲を為さず」とある。古来中国の人々は、死後に祀り手のない亡魂は「厲鬼」となり人々に災いをもたらすものと考え、それを避けるため様々な祭祀を行ってきた。『管子・輕重甲』には、管仲が堯の五人の臣下の霊「五厲」を祀ることを復活させた記事があり、厲鬼を恐れ祀ることが古くから行われていたことがわかる。

疫病をはやらせる疫鬼をはらう「儺」もそのような儀礼の一つである。宮廷で行うのを大儺とよび、民間で行うのは郷（人）儺とよんだ。人が大量に死ぬのは、戦乱と疫病の流行による場合が多い。そのたびに多くの死霊つまり「鬼」が生まれた。戦乱が続き中原地域から江南へ移住する人が多く出た南北朝のころはとくに「疫鬼」が問題になった。疫病は「鬼」がもたらす病であると考えられたため「鬼疫」「鬼病」という語も生まれた。

『女青鬼律』は南北朝時代の天師道の戒律の書であるが、その巻六にこの世のさまざまな災いは「人事が理を失う」からであり、（天が）今五主を派遣しそれぞれ万鬼を率いて、天下に分布させ、凶惡を誅除させるといい、五鬼主それぞれの姓名とつかさどる病名を記している。⁽⁶⁾

東方青炁鬼主姓劉名元達、領万鬼、行惡風之病。

南方赤炁鬼主姓張名元伯、領万鬼、行熱毒之病。

西方白炁鬼主姓趙名公明、領万鬼、行註炁之病。

北方黒炁鬼主姓鍾名士季、領万鬼、行惡毒霍乱心腹絞痛之病。

中央黄炁鬼主姓史名文業、領万鬼、行惡瘡癰腫之病。

そして、「右が五方鬼主である。名を生録（寿命を記した帳簿）に著け種民（慎み深い道教信者）たろうと欲すれば、この文書に基づき病に応じてこれを呼び、領鬼（鬼主を指す）の姓名を知ると病は即座に癒える。人々それぞれ一通を書き、身につけてこれを読めば、罹る災害はみな消えさる」（右五方鬼主、諸欲著名生録為種民者、按此文書、随病呼之、知領鬼姓名、病即差矣。人人各写一通、繫身讀之、令罹災害皆消）と述べる。ここでは、劉元達、張元伯、趙公明、鍾士季、史文業は万鬼を率いてさまざまな病をもたらす「鬼主」である。その名を知れば疫病の害が避けられる。

このあとに、多くの「温鬼」（瘟の字が生まれるまでは温字が用いられた）の名を列挙する。あまりに煩雑になるので、いちいちその名を記さないが、それらの温鬼が月や日時に応じて現れ病をまき散らすと記されている。「劉元達等が五方を毒害する。道教の戒めを守らなければ、その殃（わざわい）を受け、善を行いひたすら努め、道を心にたもち教えに遵いその名を知ることができれば、（それらの鬼は）みなともに法に降伏する。去るべき者はそれぞれ自分からその管制から逃げだそうとするし、とどまるべき者はその兇党を却けよりいっそう自制しあって善人を犯さない」（劉元達等、毒害五方。不得道戒、皆受其殃。行善精勤、存道遵教、能知名、皆共降伏法。応去者各自遠迸制、応留者却其凶党、更相約束、不犯善人）とある。

劉元達などの五方鬼主が五方の温鬼を率いてさまざまな厄災をもたらし、道教信徒が戒律をまもり敬虔な態度を保持することができれば、そのような温鬼の蠢動をコントロールできると観念されていたのである。この温鬼（瘟鬼）のオンが和語化したものこそが、日本語のオニの語源だと筆者が指摘してきたものであった。⁽⁷⁾

梁の陶弘景撰の『真誥』という神仙のお告げを記録した書の卷十に、「天帝、土下塚中の王氣五方諸神の趙公明らに告ぐ。某国の公侯、甲乙年如干歳、生きては清真の氣に値し、死して神宮に帰す……（天帝告土下塚中王氣五方諸神趙公明等、某国公侯、甲乙年如干歳、生値清真之氣、死歸神宮……）とあり、ここでの趙公明は地下の塚を守る五方諸神の一人になっている。趙公明は冥界王・五道大神とも重なる役割を担っていたのである。五道大神については別稿を参照されたい。⁽⁸⁾⁽⁹⁾

道蔵本『太上洞淵神呪経』は、前半十卷は王纂という扶乩（筆占い）の予言を集めたものであり、後半の十卷とは体裁上もはっきりと分かれている。前半十卷が六朝時代に成立し、後半十卷は唐代以降に付加されたとすることで、研究者の意見はほぼ一致しているという。⁽¹⁰⁾

卷一 太上道君（靈宝天尊）が予言していう。「今よりこの経を転ずる処、もし疾病や裁判沙汰、家中の悪鬼あれば、この経の誠めを聞かせ、魔神の呪を念ぜよ。もし一鬼去らず妄りに大神を称し、山林社祀、世間の廟主、敗軍死将、脱籍の鬼も、来たりて邪王を助け、世人を病痛し、大法に従わざれば、十方の殺神これを収めて誅す。もしまたことさらに来たり、暴を縦にし専ら行苦毒害すれば、鬼王らこれを斬り、魔王ら身を万分になし、これを恕さず。急急如律令。」（道言、自今以去、転此経処、若有疾病、官事口舌、宅中虚耗、聞此経誠、勅魔神咒。若一鬼不去、妄称大神、山林社祀、世間廟主、壞軍死将、脱籍之鬼、來助邪王、病痛世人、不従大法者、十方殺神收而誅之。若復故來、縦暴専行苦毒害者、鬼王等斬之、魔王等身作万分、不得恕之。急急如律令。）

種々の災いをもたらす鬼が土地の雑多な鬼神と結託して人々を苦しめるならば、それらの鬼王・魔王を斬り刻むと脅し、この經典を転読することの効用を説いている。

卷三 道君がいう。「辛巳、壬午年、人民が横死し、天下は不安、死者があまた出る。鬼王の烏丸が地下の赤氣とともに人を殺す。人は多く瘟病にかかり、病む者が門々にみち、三四割が死んでしまうだろう。どうしよう。どうしよう。村々でただ清齋をひらき、五帝の神に拜謁し、家族を保護し、天神に知らしめれば、鬼王烏丸は自ら伏し、人をもう殺すことはしない。」（道言、辛巳、壬午年、人民横死、天下不安、死者衆多。鬼王烏丸与地下赤炁殺人、人多瘟病、病者門門、十有三四死矣。奈何、奈何。唯有村村大會清齋、拜謁五帝之神、自保家口、令天神知之、鬼王烏丸自伏、不復殺人矣。）

瘟病がはやるときは五帝の神を祀るのを勧めている。五帝とは五方の天帝の意で、この經典でしばしば言及される。なお烏丸は北方の異民族名であるが、ここでは鬼王とされている。五帝に拜謁し頼みこめば、鬼王は自ら伏して害をなさないというのであるから、五帝と鬼王との間には地上における

帝と王との関係に類する主従の関係があると考えられていたのであろう。

卷七 道君がいう。「国土に大鬼主鄧艾、鍾士季、趙山、王莽、李敖、杜週、劉斗烏、王離、夏侯嬰、蔣公琰、南陽葉公里、夏檀支、蕭何、申屠伯、韓信、田進、樑洪、高沛、孫溫、司馬迴、劉元達あり。これらの大鬼が世人をそそのかし、武帝文王を祠祀させ、世間で供養し、立祠が絶えない。おのおの兵馬あり、天下の人のために祟りを作り、祟病殺人す。年々月月、千万種の病をはやらせる。或いは四肢沈重し、寒熱下痢し、膨れる下腹、黒く病む頭と目は痛み、胸や背が熱くなる。或は黄疽や咳がでて、嚥喉通ぜず。一切の万病が際限なく人を殺す。(道言、國土有大鬼主鄧艾、鍾士季、趙山、王莽、李敖、杜週、劉斗烏、王離、夏侯嬰、蔣公琰、南陽葉公里、夏檀支、蕭何、申屠伯、韓信、田進、樑洪、高沛、孫溫、司馬迴、劉元達。有此大鬼、主令世人、或有祠祀、武帝文王。世間供養、立祠不絶。各各有兵馬、為天下人作祟、祟病殺人。年々月月、行千万種病。或四支(肢)沈重、寒熱下痢、臃腫水腹、黒病頭目悉痛、胸背燠熱、或有黃瘰警欬、嚥喉不通。一切万病、殺人無度矣。)

鄧艾以下の大鬼主が世人に武帝文王の祠を立て祀らせて、その祭祀が絶えず、それら鬼主がそれぞれ兵馬を従え人々に祟って襲いかかり、種々さまざまな病気をもたらしていると言っている。個人名のついた鬼主が生前どのような人物であったのか今では分からないのもあるが、多くは敗軍死將の亡魂であったのであろう。また次のような一段がある。

道君がいう。「これらの人みなことごとく往時の大將、事に任じた人であり、死後それぞれ祠を立てる人がいて、祀るのが止まらない。今伝うるに百鬼がそれにとりつき大衆を為し、人の様子を伺い人々を殺害す。人を水と火のごとく言い争わせ、訴訟ごとが絶えず、突然に襲いかかり、人の大量死がこれまで幾度となく繰り返されてきた。今、赤盧(?)大禁兵、身長万丈の八十万人を派遣し、それぞれ三億万衆を率いさせ、(地上に)下りてこれらの鬼王をとらえ、ただちに斬り殺し、許さない。(道言、此等之人、皆悉是往時大將、任事之人、死亡之後、各有人立祠、祀之不止。今伝有百鬼附之、唯成大衆、仍伺人形、便殺害百姓。令人水火口舌、官事万兇。兇來奄殺、人口多死、從來非一。今遣赤盧大禁兵、身長万丈、八十萬人、各領三億万衆、來下收捕此等之鬼王、得便斬殺之、不恕矣。)

それらの鬼王はもとは往時の大將であり、人々が祠を立てて祀り多くの鬼がそこに寄りつき、災いを引きおこしている。今、赤盧(?)の大禁軍を派遣して鬼王を取り押さえ、斬り殺すと予言する。

卷九 癸未年になると、疫鬼が七十種の病をはやらせ人を殺す。もし活きたければ、家々でこの齋を建修し五帝を拜謁し南向して三十拜する。さすれば疫鬼は自ら万里に去るだろう。(至癸未年、疫鬼行七十種病殺人。若欲求活、家家建修是齋、拜謁五帝、南向三十拜。疫鬼自去万里矣。)

ここでも疫病に際しては五帝祭祀が必要だと予言している。

卷十一 また劉元達、張元伯、趙公明、李公仲、史文業、鍾仕季、少都符あり、それぞれ五傷鬼精二十五萬人を將て、瘟疫病をはやらせる。これら諸鬼王、聞三昧神咒天王および明羅真人、多聞天女、說三天六天大邪王等、故気鬼賊、傷精名字、皆大いに驚怖す。(又有劉元達、張元伯、趙公明、李公仲、史文業、鍾仕季、少都符、各將五傷鬼精、二十五萬人、行瘟疫病。此等諸鬼王、聞三昧神咒天王、及明羅真人、多聞天女、說三天六天大邪王等、故炁鬼賊、傷精名字、皆大驚怖。)

劉元達、張元伯、趙公明、李公仲、史文業、鍾仕季、少都符などの鬼王がそれぞれ五傷（五種の病）の鬼精を率いて瘟疫の病をはやらせるという。「此等諸鬼王」以下の一段は意味が分明でない。

卷十三では「東方青帝青龍王、南方赤帝赤龍王、西方白帝白龍王、北方黒帝黒龍王、中央黄帝黄龍王」とあり、五帝にはそれぞれ五色と靈獸の龍王が配される。

卷十四「殺鬼歩頌品」は、五帝の齋醮についてより詳しい記述がある。

道君がいう。「私が明羅真人に告げていう。これより後、もし善き心を持った人、災疫に遭わば、三洞の道士をまねき経を転ぜよ。葷辛を断ち、色欲を除去し、こころをこめて黙念し、雜念をはらい、つねに五帝尊神、靈官將吏、左右侍衛を存見（慰問）すべし。齋主は心をこめて誠をつくし、法師を礼拝する際は、天真神仙がこの世に下りて民難を救うようお願いすべし。……この宝經一部を転ずると、天兵が下りてきて、魔王は手を束ねてなすすべがない。もし我が言によらなければ、魔王烏鄰子は頭をこなごなに割り砕かれる。その時、明羅真人が五帝の神仙兵馬をまねいて齋醮の場に下ろし、鬼賊を探し捉まえる。(道言。吾告明羅真人曰、自今以後、如有善心之人、横遭災疫、仍請三洞道士、為其轉經。須断葷辛、去除色欲、洗浣身心、專情默念、不得雜想、常須存見五帝尊神、靈官將吏、左右侍衛。齋主志心勤誠、靈拜法師時、須召請天真神仙下降、救護民難。……転此宝經一部、天兵下降、魔王束手。若不依吾言、魔王烏鄰子、頭破作三分矣。爾時、明羅真人迺上請五帝神仙兵馬、降至道場、搜擒鬼賊。)

ここでは明羅真人が五帝との間の仲介役として登場する。五帝の配下に靈官將吏が侍従し鬼を捕捉するが、以下のように記されている。

東方青帝九夷君、青神將軍九九八十一萬人、東郷神仙諸靈官、一合來下、收捉東方青瘟木精之鬼。南方赤帝八蠻君、赤神將軍八八六十四萬人、南郷神仙諸靈官、一合來下、收捉南方赤瘟火精之鬼。西方白帝六戎君、白神將軍六六三十六萬人、西郷神仙諸靈官、一合來下、收捉西方白瘟金精之鬼。北方黒帝五狄君、黒神將軍五五二十五萬人、北郷神仙諸靈官、一合來下、收捉北方黒瘟水精之鬼。中央黄帝三秦君、黄帝將軍三三九万人、中郷神仙諸靈官、一合來下、收捉中央黄瘟土精之鬼。

鬼神の世界は帝一將軍一靈官一鬼と階層をなしており、それぞれ五行説に基づき命名される。また卷十四の末尾の段に、以下のような文言がある。

道君がいう。「今より後、天下国土、しきりに瘟疫にみまわれることがあれば、ことごとく魔王烏鳴鳩らが將る鬼衆が災禍を為し、天下を遊行し、民の祖先の死魂とともに瘟疫をはやらせ、国民を殺害しているのだ。善心のものがあるなら、保全の心をおこし、三洞の法師をまねき、道場を立て、経を転読し呪を念じ、法によりて章を陳べ、齋を設けて醮を祭り、五帝神仙を祈禱せよ。功德はかぎりなく、瘟を除き福をまねく功は無比である。」(道言。自今以去、天下國土、若有頻年遭罹瘟疫、悉是魔王烏鳴鳩等所部鬼衆為於災禍、遊行天下、與民親七祖逝魂、同行瘟疫、殺害國民。若有善心之者、能發保全之心、詣請三洞法師、置立道場、轉經念咒、依法陳章、設齋祭醮、祈禱五帝神仙、功德無量。除瘟降福、功無比儔。)

魔王烏鳴鳩がどういうものか分からないが、瘟疫などの災いを引きおこす元凶とされており、それに対抗するには、五帝の祭祀が大事であると述べている。

十五巻でも次のような一段がある。

もし国民が多く疾、官府の裁判沙汰、水害干害虫害、戦争伝染病に遭い、医者をもよんでもなおらないとき、三洞の法師をまねき、靈壇を設け、経を転読し呪を誦し、表や章を奏呈し、齋を建て醮を設け、五帝を祠に祀り謝する。……

(若有国民、遭罹衆疾、官府獄訟、繫閉經年、水旱蟲蝗、兵革疫癘、諸医不愈者、但請高行三洞法師、潔置靈壇、轉經誦咒、奏表呈章、建齋設醮、祠謝五帝、……)

病気や戦争をはじめとするさまざまな災いに対して、法師をまねき五帝の祭祀を行うことの重要性が述べられ、五帝への帰依が強調されている。以上の『太上洞淵神呪経』の引用はすべて『正統道蔵』による。⁽¹¹⁾

南北朝のころの撰人不詳『太上正一法文経』も五帝に言及する。⁽¹²⁾

また五帝神官がいて、それぞれ五厄をはやらせ、悪人を監察している。一つは青帝神官で、青瘟・青疫・青毒・青蠱・青蠃・青吹をはやらせる。これに逢うと、頭痛と激しい熱、傷寒時氣、霍乱下痢、手足が煩疼し、肩背が強直し、飲食は不能、身体が痛楚、骨肉辛酸、言語恍惚、人事不省になる。二つは赤帝神官で、赤瘟・赤疫・赤毒・赤蠱・赤蠃・赤吹をはやらせる。これに逢うと官家牢獄し、扭械枷鎖、文書口舌、刑徒撃閉、鞭笞考楚、痛惱百端す。三は白帝神官で白瘟・白疫・白毒・白蠱・白蠃・白吹をはやらせる。これに逢うと刀兵劫賊、虎狼虫蛇、蜂蠆毒物、以相中害、身形を傷損す。四は黒帝神官で、黒瘟・黒疫・黒蠱・黒毒・黒蠃・黒吹をはやらせる。これに値うと江河山谷、水泉沈溺、漂流淹沒、淪蕩死亡す。五は黄帝神官で、黄瘟・黄疫・黄蠱・黄毒・黄蠃・黄吹をはやらせる。これに当ると山石頽毀、屋宇崩壊、車破馬亡、草木压迕、衆毒加身す。これらの神官は、おのおの殺鬼三百万人を將い、手に五刀を持ち人間をいく。(復有五帝神官、各行五厄、以伺惡人。一者青帝神官、行青瘟、青疫、青毒、青蠱、青蠃、青吹、逢之者頭痛壯熱、傷寒時氣、霍亂下痢、手足煩疼、肩背強直、不能飲食、身體痛楚、骨肉辛酸、言語恍惚、不自覺知。二者赤帝神官、行赤瘟、赤疫、赤毒、赤蠱、赤蠃、赤吹、遇之者官

家牢獄、扭械枷鎖、文書口舌、刑徒繫閉、鞭笞考楚、痛惱百端。三者白帝神官、行白瘟、白疫、白毒、白蠱、白蠃、白吹、遭之者刀兵劫賊、虎狼蟲蛇、蜂蠆毒物、以相中害、傷損身形。四者黑帝神官、行黑瘟、黑疫、黑蠱、黑毒、黑蠃、黑吹、值之者江河山穀、水泉沈溺、漂流淹沒、淪蕩死亡。五者黃帝神官、行黃瘟、黃疫、黃蠱、黃毒、黃蠃、黃吹、當之者山石頽毀、屋宇崩壞、車破馬亡、草木壓迕、衆毒加身。此等神官、各將殺鬼三百万人、手持五刀、行於人間。)

五帝の神官が悪人を監察していて、その悪事に応じた種々の病・厄災をもたらす。五帝神官はその配下にそれぞれ手に刀を持つ殺鬼三百万人を従えてこの世の中に襲いかかるという。

南北朝末あるいは隋唐の交に成ったとされる『道要靈祇神鬼品經』には、『太上女青鬼律』にいうとして、「東方青氣瘟鬼は高遠、南方赤氣瘟鬼は士玄、西方白氣瘟鬼は伯桑、北方黒氣瘟鬼は文遐、中央黄氣瘟鬼は君太黄奴、第六鬼は誅女、第七鬼は陵、七鬼の祖父は梁州、祖母は交成、父は延年、母は出中という名である。右の五鬼・鬼兄弟・父母は九祖父母ともに人の姿をしており飛ぶことができ、月に随い毒をまいて悪人を誅する⁽¹³⁾」とある。

また、この書には「東方青帝直符鬼、名伯神子、一名杲子」、「南方赤帝直符鬼、名泰伯子」、「西方白帝直符鬼、名伯和子」、「北方黒帝直符鬼、名泰衣子」、「中央黄帝直符鬼、名伯溪子、一名泰淵」などという神名も見え、五帝に配される名前もさまざまであった。五方瘟鬼あるは五帝に配される人名がまだ一定していなかったことが分かる。また、直符とは中国占星術で神獣の十二天将、青竜・白虎・玄武・朱雀・貴人・騰蛇・六合・勾陳・天空・太常・太陰・天後のうちの貴人のことを指すが、ここでは単に神獣の代表としてこの語が用いられているようである。十二神獣のうちの青竜、白虎、朱雀、玄武は麒麟とあわせて「五霊」といい（孔穎達『春秋左伝注疏』巻一に「麟、鳳〔赤い鳳を朱雀という〕と亀〔最初期の玄武は烏龜とされる〕、龍、白虎の五者は、神霊の鳥獣、王者の嘉瑞なり」とある）、それぞれ東、西、南、北、中央の五方に配され、各方位の守護神になる。五方に五色・五霊を配するのは由来が久しい（『春秋左伝注疏』巻五十三に「正義曰、漢氏先儒説左氏者、皆以為五霊配五方、龍属木、鳳属火、麟為土、白虎属金、神龜属水」とある）。

『女青鬼律』で五方五色の鬼主といわれていたものが、『道要靈祇神鬼品經』では五方瘟鬼あるいは五帝と称され、ともに人名が配されること、また五帝に靈獣が組み合わされることに注目しておきたい。

隋唐時代の文献には、五瘟鬼は見えるが五瘟神という語は見出せない。ところが宋代の文献、たとえば『請益録』に「五瘟使者⁽¹⁴⁾」の語、『夷堅志』には五人の「瘟神」の記事が見出せるようになる⁽¹⁵⁾。南北朝を通じて五鬼主・五方鬼王・五帝などの語で呼ばれていた疫鬼・瘟鬼を統率する頭目の名称が、唐代を経るあいだに劉元達以下の五人の人名としだいに結びつき、疫病をはやらせるだけでなく、疫病の流行を止めもする五瘟神へと変化していったものと推測される。つまり五瘟鬼は隋唐代を通じて五瘟神へと正神化の道を歩き始めたのである。『三教源流搜神大全』が隋時代に五瘟神が立祠されたというのは由なしとはしない。その過程で五瘟神は五帝・五霊の觀念とも結びつき、五帝や五霊と同一化し、ほんらい靈獣の五霊であったものが五人の敗軍死将の靈魂の意の五霊に変わっていったと推測される。民間信仰では五瘟神と五帝・五霊はほぼ同一の神格のように見なされている。

福建・台湾の瘟疫神は五帝と称される。清・謝金鑾『続修台湾県志』に、

「五帝廟（また五聖王ともいう）は寧南坊にある。『旧志』によると五帝は五行の帝である。また曰わく、邑の祀るところは五顯靈官である。按ずるに五行の帝は經典に見えるので天子の祀るものであるが、五顯靈官は巫祝がそう称するだけである。……けだし所謂五通・五聖はこれと同じであるが、五顯とはいはないだけだ。福州で祀る五帝は、瘟疫神と見なし人々はそれを怖れる。按ずるに五色の塑像ははなはだ兇悪で、民間でいざこざがおこり解決しないとき、その廟の前で鼓を撃ち誓いを立てると、五顯（靈官）にまで事が及ばないで解決する。」（五帝廟〔亦名五聖王〕、在寧南坊。按「旧志」云、五帝者五行帝也。又曰、邑所祀者五顯靈官也。按五行之帝見于經典則天子之所祀也。五顯靈官則師巫之所称耳。……蓋所謂五通、五聖者如此、然不云五顯也。今福州所祀五帝、衆以為瘟疫神、群怖之。按五色塑像頗兇惡、民間有小訟不決、擊鼓設誓于其廟、遂積而亦不及五顯。）

⁽¹⁶⁾
とある。

福建の瘟神は五帝ともいうが、また別に五靈公とも号された。郭白陽の『竹間続話』に次のように⁽¹⁷⁾いう。

福州の淫祠は五帝が最も甚だしい。俗に九庵十一澗の称がある。九庵は、復初・崇聖・廣慧・明真・龍津・茶亭・路通・蛤埕および九福である。十一澗は、東澗・西澗・南澗・北澗・水澗・湯澗・井澗・芝澗・嵩山澗・鐘山澗・および大西澗である。みな土地に因んだ名である。五帝の姓は張・鍾・劉・史・趙であり、また顯・應・宣・揚・振の五靈公と号した。

疫病をはやらせる五帝が敗軍死將の冤魂と見なされるようになって、その別号として顯靈・応靈・宣靈・揚靈・振靈の五靈が案出されたのであろう。なお、五顯・五聖・五通は名が違うのみで実際は同じ神であるとする説は、論者により意見が分かれる。複数の神々が習合し合って複雑な様相を呈している。その解明は今後の課題としておきたい。

三 『仏説灌頂経』と『仁王経』

(1) 『仏説灌頂経』

中原からの人口移住がすすみ、江南の地が開発された六朝時代、疫病が多発した。道教徒のみならず、仏教徒も疫病の蔓延に乗じて、布教を展開し信者を獲得しようとした。五世紀の成立かとされる『仏説灌頂経』（東晋天竺三藏帛尸梨蜜多羅訳）巻二の『仏説灌頂十二万神王護比丘尼経』は、『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版）によると「仏が舍衛国祇樹給孤独園において、諸魔に精気を吸われて悩害されている七人の比丘尼に対し灌頂章句（鬼神の名前を唱えてさまざまの障害を除く呪文とする陀羅尼呪句のこと）⁽¹⁸⁾を説くものである。この仏典に帝釈天から派遣される三十六善神のうち彌栗頭羅婆那（漢言善吉）は「五温」を主るとある⁽¹⁹⁾。また「仏が王舎城竹林精舎において阿難の問いに対して、維耶離国に病気の蔓延する因由と、人民を害する小毒龍・鬼魅などを鎮める五方竜王の名字である無上神呪を説く」（『大蔵経全解説大事典』）巻第九の「仏説灌頂召五方龍王攝疫毒神呪上品経」

には、

仏が阿難に告げていった。汝よくきけ。東方の青龍神王、その首領の名は阿脩訶といい、(配下の)四十九龍王は東方小龍のなかま七十万億の山精雜魅(鬼魅雜神)を率いて毒病厄難する。その名前をいうと、病者の身を護り、小龍に毒を収めさせ、病者を害せず、身中の諸毒を自然消滅させることができ、病は癒え熱はなくなり、元どおりに平復する(佛告阿難、汝當諦聽諦受。東方青龍神王、上首者名曰阿脩訶。七七四十九龍王、典領東方小龍伴侶七十萬億、山精雜魅、毒病厄難。皆當說其名字護病者身、能使小龍攝毒不害病者、使身中諸毒自然消滅。病愈熱除平復如本)。

(以下訳は省略し、龍王、首領名、配下の龍王、鬼魅類だけを取りだして表にして記すと、以下のようになる。)⁽²⁰⁾

五方神王	首領名	配下の龍王	小龍及鬼魅
東方青龍神王	阿脩訶	四十九龍王	東方小龍伴侶七十萬億、山精雜魅
南方赤龍神王	那頭化提	三十五龍王	五十萬億諸山精魅鬼、二十萬億弊小龍輩
西方白龍神王	訶樓薩叔提	二十一龍王	九十萬億諸小龍輩、及山精魅鬼二十萬億
北方黑龍神王	那業提婁	二十八龍王	百億諸小龍輩、及山精魅鬼十三萬億
中央黃龍神王	闍羅波提	二十八龍王	諸小龍輩六十萬億、及山精雜魅鬼十二萬億

『仏説灌頂經』のこれらの神呪は、先述の『太上洞淵神呪經』卷十四の「殺鬼歩頌品」とよく似た表現になっている。まず神仏とその高弟がいて、その高弟により、五方の神を配下の將軍ともども呼び降ろし、青瘟木精之鬼や山精雜魅の毒を収めさせる。仏典ではあるが、「中国の俗信仰の要素が認められる」(雄山閣『大蔵經全解説大事典』)とされる所以である。太上道君にたいしては仏、明羅真人にたいしては阿難、東方青帝にたいしては東方青龍神王、青神將軍八十一萬人・東郷神仙諸靈官にたいして四十九龍王が対応し、最下位には東方青瘟木精之鬼と山精雜魅とが対応し、疫病をはやらせる実行部隊となる。『仏説灌頂經』には龍王のもとに小龍伴侶がほかにいて、鬼魅類と混ざり合っている。表に示すと以下のようになる。

神/仏	高弟	五方帝/神王	配下の將軍/龍王	鬼魅
太上道君	明羅真人	東方青帝	青神將軍八十一萬人・東郷神仙諸靈官	東方青瘟木精之鬼
佛	阿難	東方青龍神王	四十九龍王	小龍及山精雜魅

先述した『太上洞淵神呪經』卷十四の「殺鬼歩頌品」では、「東方青帝九夷君、青神將軍九九八十一萬人、東郷神仙諸靈官」が「東方青瘟木精之鬼」を「収捉(とりおさえる)」とあり、対立関係がはっきり示されるが、『仏説灌頂經』の仏呪の場合、小龍伴侶と山精雜魅とのあいだは「及」でつながり、あたかも鬼魅類は五方神王・龍王の一味のようである。いずれにせよ疫病を止めるには、五方の疫鬼や鬼魅を管理統括する、五方の天帝・將軍や神王に頼んで、かれらを嚴重にとりしまってもらふほかないというのが、これらの経文の基本的な態度である。こういう観念が、南北朝から唐代にかけてのこれら道書・仏書に非常にはっきり現れている。

六世紀の『荊楚歲時記』に、

「十二月八日為臘日。「史記」陳勝伝に、「臘日」の言有り。是此を謂うなり。諺に言う、「臘鼓鳴り、春草生ず」と。村人並びに細腰鼓を撃ち、胡公頭を戴き、及び金剛力士を作り、以て疫を逐う。沐浴し罪障を転除す（守屋美都雄訳注、平凡社）⁽²¹⁾。

とあり、年末の逐疫祭祀「儺」に、方相氏に替わって、金剛力士が登場している。「胡公頭」とは「醜怪かつ巨大な鬼面」であり、それをかぶり疫鬼を祓ったのである。金剛力士は守屋の注釈によると、「仏教の盛行につれて、この方相氏が仏教の金剛力士に転化し、……金剛神・執金剛・金剛夜叉または仁王と呼ばれ、寺院山門両脇に位置し、金剛杵を執って仏法を守る神」のことである。民間で行われた儺、郷人儺では、その主役が時代や地域により変化するのである。

(2) 不空訳『仁王護国般若波羅密多經』

八世紀のころの中国では密教が隆盛したが、密教を「本格的な護国の教法へと変貌させた最大の功労者」として不空の役割が大きかった。藤善真澄は、⁽²²⁾「不空こそ密教に護国思想を持ち込み、自らそれを実践した最初の人物であり、わが国に仁王經曼荼羅をはやらせるほど『仁王經』ブームを生み出した張本人でもあると断定してよかろう」といい、四世紀の鳩摩羅什の訳とされる『佛說仁王般若波羅蜜經』は、いわゆる疑偽經典であり実際は六世紀はじめに成立したと考えられるのに対して、不空訳では、旧訳の五大力菩薩が金剛頂系の密教諸尊にすりかえられ、「陀羅尼を導入し陀羅尼の聴聞によりあらゆる罪障は消滅し国内にはとこしえに災難がなくなる」と完全に密教經典化していると指摘している。⁽²³⁾

不空（八世紀）の『仁王護国般若波羅密多經』奉持品では、五大力菩薩はそれぞれつぎのように置き換えられている。

鳩摩羅什訳	不空訳
金剛吼菩薩	東方金剛手菩薩摩訶薩
龍王吼菩薩	南方金剛寶菩薩摩訶薩
無畏十力吼菩薩	西方金剛利菩薩摩訶薩
雷電吼菩薩	北方金剛藥叉菩薩摩訶薩
無量力吼菩薩	五菩薩摩訶薩

五大力菩薩が金剛手菩薩以下の五方菩薩に置き換えられ、以下のような付加部分がある。

爾時に、金剛手菩薩摩訶薩等、即ち座より起て、佛足を頂禮して、却て一面に住して而も佛に白して言さく。世尊、我等の本願は、佛の神力を承けて、十方世界の一切の國土に、若し此の經を受持し、讀誦し解説する處あらば、我當に各々是の如くの眷屬と與に、一念の頃に於いて、即ち其所に至って、正法を守護し、正法を建立すべし。其國界をして、諸々の災難なく、刀兵疾疫一切皆除かしめん。世尊、我に陀羅尼あり、能く加持し擁護す。是一切の佛の、本修業（正しくは行）し給ふ所の速疾の門なり。若し人聞くことを得て、一たび耳に経れば、所有の罪障悉く皆

消滅せん。況や復誦習して而も通利ならしめんをや。法の威力を以て、當に國界をして、永く衆々の難なからしむべしと。即ち佛の前に於いて、異口同音に陀羅尼を説て曰く。⁽²⁴⁾

この五菩薩が五方に配され、世尊にたいし仏弟子として一切の障害を取り除くのを誓うという内容であるから、下界の悪を取り除く五帝の役割とそっくりである。なお、五方菩薩は真言密教の五大明王にもつながると云われる（法蔵館『密教大辞典』「五大明王」⁽²⁵⁾）。

『太上洞淵神呪経』でしばしば言及される五帝の祭祀から判断して、唐代には瘟疫神の五帝祭祀が行われていたにちがいない。はじめは五行説に基づき、ただたんに五方の天帝の意味で五帝と称され、靈獣の五靈と組み合わされていたのが、しだいに敗軍死將の五人の個人名と結びつくことにより、非業死した五人の靈が瘟疫神として祀られたのだと、人々が考えるようになって、五瘟神が成立したのであろう。つまり、道書に見える五鬼王（主）・五帝の祭祀儀礼に、仏教側からは金剛力士・五大力（五方）菩薩などの神々の影響も加わり、敗軍死將の個人名と結びつき、また別稿（「武塔神とは何だったか」⁽²⁶⁾）で指摘した疫神化した五道神とも重なり合い習合することにより、民間信仰の五瘟神（五瘟使者）の觀念が形成されたと推測される。

四 最澄『長講金光明経会式』『長講仁王般若経会式』の「御霊」

これまで御霊の史料上の初出は、貞観五年五月二十日の御霊会に関する『日本三代実録』の記事と考えられてきた。御霊会の成り立ちについての議論はほとんど唯一この史料に基づいて行われてきたといってもよい。ところが最近、最澄の『長講金光明経会式』と『長講仁王般若経会式』に御霊の語が出ることに着目し、二つの会式の文末にはいずれも弘仁四（八一三）年六月最澄記とあるところから、貞観五年よりおよそ五十年前にすでに御霊会の先蹤としてこれらの法会が行われていたと主張する注目すべき論文があらわれた。櫻木潤の博士論文『御霊信仰研究』⁽²⁷⁾である。貞観五年の御霊会の祭神として祀られた六人（五人とする説もある）の御霊のうち四人（崇道天王、伊豫親王、藤原吉子、藤原仲成）までもが、同じく御霊とされていることから考えて、大同末年から弘仁年間にかけての最澄による法華経・金光明経・仁王般若経の護国三部経の長講会は、疫病退散を祈願し金光明経・般若心経が講じられた貞観五年神泉苑での御霊会の先蹤をなすと考えられる、と櫻木はいうのである。

一方、佐藤道子によれば、最澄は修学の基礎として護国三部経の長講会（長期間にわたって經典を講説する法会を指す一佐藤）を重視したという。会式という表題が示すように、これら二種の文献は金光明経と仁王経の「法要の次第に従って詞章が記され」たものである。会式の「結願」部⁽²⁸⁾において、天神地祇のみならず、横死の諸靈（「崇道天皇御霊等、伊豫親王御霊等、藤原夫人（伊予親王の母親吉子）御霊等、藤原仲成神霊等」）から「十方十世冥道官、閻魔法王五道神、牛頭馬頭及獄卒」まで、「四惡趣の諸衆と迷界の最たる者が救済される一方で国や仏法を守護するという立場を与えられている」ことに、佐藤道子は大きな特色を見いだしている。

この二つの会式は、形式内容ともに似たところがあり、そのいずれにも御霊という語が用いられる。ここでは『長講仁王般若経会式』の「結願頌」の一部を引用する。（下線筆者）

我等至心発弘誓。十方十世三界天、資益二十八天衆、梵王帝釈及四天、天龍八部百部鬼、風雪雲雨各各神、雷電霹靂大惡龍、天神地祇靈鬼等、大小比叡山王等、比良三枳安山王、長澤河内諸天神、飯道笠扶淡海神、賀茂大神上下族、住吉大神諸眷屬、氣比大神及五子、氣多大神諸眷屬、伊部山王足羽神、多度大神諸眷屬、名草上下溝口神、八幡大神諸眷屬、宗像大神諸眷屬、賀春大神諸眷屬、賀羅大神諸眷屬、師比御靈諸眷屬、山林樹下護國神、水陸原沢一切精、永離業道一切患、乃至煩惱及所知、多聞熏習念念増、威光増益恒守護、叡山道場正法藏、大日本國及九院、興隆仏法盡後際、恒説一乘利群生。

南無阿閼仏

資益一切皇靈等、開闢已還諸尊靈、上宮太子御靈等、法師天皇御靈等、阿倍天皇御靈等、桓武天皇御靈等、吉野太后御靈等、崇道天皇御靈等、伊豫親王御靈等、藤原夫人御靈等、藤原仲成御靈等、藤原内侍神靈等、東夷毛人神靈等、宏勝延命僧靈等、結恨横死古今靈、乃至一切神靈等、永離八難生天上、随意往生諸佛刹、聽聞妙法悟無生、得道還來日本國、昼夜守護恒不離、叡山道場正法藏、大日本國及九院、興隆佛法尽後際。

前段にある「師比御靈」という語句は、これまで誰にも注目されなかったのではなからうか。師比とは何か、漢字の字義からでは意味が分からない。この句の後に続く、「山林樹下護国神、水陸原沢一切精」というような雑神・鬼魅のたぐいを思わせる語のすぐ前にあること、そしてシビという字音から判断して（魍魎や魍魎など妖怪の名称は連綿語、つまり疊韻・双声の二字で構成される場合が多い）、おそらくこのシビは鴟尾の当て字であろう。鴟尾は螭吻ともいい、魔除けの靈獣で屋根の上に置く装飾として用いられ、火伏せの靈験があるとされる。龍の九子の一つともいう。このシビ（鴟尾）のあとの「御靈」とは何か。まず先祖のミタマであろうはずはない。

また、これらの神々の名を列挙する冒頭に用いられる「資益」という語に注目する必要がある。佐藤道子が「救済される一方で国や仏法を守護するという立場を与えられている」と訳している語である。ここに挙げられる神靈は、地方的あるいは雑神的な神々、鬼魅類までもふくまれる。これらの神々をその境遇から救いだし、護国護法の守護神として引き立てるとするのが「資益」の意味であろう。雑神を仏教に取り込み護国の守護神に仕立てる護国思想が顕著に現れている。前述した道書や仏書の神呪と同じく、それらの神名を読み上げることじたいが呪文のような効果を発揮するのであろう。

櫻木潤は「御靈信仰とは、非業の死を遂げた人物たちの靈を『御靈』として慰撫し、信仰の対象とする」という考えに立って、「慰撫」という語を頻用する。しかし怨靈あるいは御靈を慰撫するなどという用例は、文献上いつごろから確認できるのか知りたいものである（坂本要は『怨靈・御靈を鎮魂する』という用語は近代に生みだされた」といっている。また柳田国男は「彌五郎には(29)慰撫し送却する」という表現をとっている」という。とすると、「慰撫」は柳田国男が言い出したものか。最澄の用法にみるかぎり、まず御靈は「資益」の対象であったことを確認しておきたい。

むすび——ゴリャウとは——

御靈の通説的な理解は、「非業の死を遂げた者が怨靈と化して祟ったものを御靈といい、それを信

じることを御霊信仰という。御霊は『みたま』という和語の漢字表記を音読したものである」(石井⁽³⁰⁾正己)とか、「所謂靈魂一般の呼称であるミタマが、觀念の上でも二つに分かれ、清く和やかなるものをミタマと呼び、崇咎あるものを特にゴリョウと発音して区別するようになった」(堀一郎⁽³¹⁾)といったところであろう。しかしミタマの漢字表記である御霊を音読みと訓読みで区別するというのは、いかにも後知恵でしかない。同じ漢語を使いながら、音読みと訓読みで区別し別の觀念を言い表さねばならない理由や契機が説明されねばにわかには信じがたい。「御酒」を「みき」あるいは「おさけ」と読むか「ゴシュ」と読むかで、ニュアンスは異なるものの意味がさほど違うわけではない。

先述した最澄の会式には「師比御霊」と「崇道天皇御霊等」などが並置されるが、そこに含まれる二つの「御霊」を統一的に解釈し説明できる考えが示されねばならない。「師比御霊」の方は無視して、崇道天皇以下の失脚者の「御霊」だけを取りあげ、音読みされて御霊(ゴリャウ)になったとするのでは、この説は成り立ち難い。「結恨横死古今霊」や「水陸原沢一切精」などととも、なぜ護国の守護神として「師比御霊」や「崇道天皇御霊等」が「資益」され(引き立てられて仏の威光を増すこと)になるのか、その背景や文脈を当時の中国仏教界の動向を一瞥することで考えてみよう。

厳耀中は、隋唐のころ密教徒が地方的な雑神・淫祠を仏教の守護神に取りこむことに熱心であったことを指摘し、つぎのようにいっている。「(江南は)複雑で変化の多い気候であり、しょっちゅう人に襲いかかる蛇獸や疫病により、それらを代表する精霊神怪は人々の眼に格別にどう猛で強力であると映った。それで仏教が雑神淫祠をとりこむ過程は、各種の自然の力との力比べの過程にほかならず、僧史のなかにこの方面の記事が大量に保存されている」。そして、密教僧が密呪を用いて雑神を収伏した事例を幾つか挙げ、「六朝から宋にいたるあいだ、とりわけ隋唐において、密教が江南においておおいに流伝したのは、おそらくこのような雰囲気や需要と分かちがたく結びついていた」と結論づけている⁽³²⁾。

最澄は805年、一年にも満たない天台山での修学を終えて帰国する直前に、わざわざ越州の順暁のもとを訪ね密教を相承した。おそらく天台山に滞在中、護国護法の守護神として地域的な雑神淫祠を収伏する密教の修法の修得が、是非とも必要であると考えたからであろう。最澄の二つの会式で御霊が護国護法の守護神として資益されるのは、中国密教の趨勢に合致するものであった。先述した『太上洞淵神呪経』や『仏説灌頂経』では、疫病などのこの世の災いは、多くの敗軍死将の魔王・鬼王に率いられた瘟鬼・鬼魅によって引きおこされると考え、五帝や五方神王に働きかけて瘟鬼を厳しく取り締まってもらうという災厄観・瘟疫観が顕著であった。最澄は中国滞在中にそのような瘟神祭祀の実際を目撃したにちがいない。

さて、ゴリャウとは一体何であったかと、いったんその「御霊」という漢字から離れ、音声としてのことばに基づいて推論してみよう。まず、「崇道天皇御霊等」の「御霊」は、最澄が中国滞在中目撃したであろう瘟神五帝祭祀を念頭におけば、まさしく非業死した五人の霊の意の「五霊」(五は多数の意)と考えて問題なからう。また先述したように「師比御霊」は「鴟尾五霊」の当て字であると考えると文意が通る。五方の霊獸ゴリャウ(五霊)と五人の非業死の霊のゴリャウ(五霊)は、ともに密教的修法により引き立てられて護国護法の守護神になるものであり、もとは大島建彦のいうような民間の魔除け・祟り神のゴリャウ(五霊)であった。そのように考えると最澄の会式のゴリャウ(御霊)を統一的に理解することができる。疫病など厄災が起こるのは、非業死のゴリャウ(五霊)が多

くのオニ（瘟鬼）を率いてこの世の中に襲いかかってくるからだとする厄災観オニ観念が、すでにこの列島を覆っていたのである。

御霊信仰というとすぐに政治上の失脚者の怨霊の慰撫が問題にされがちだが、別稿で指摘したように、初期の怨霊はオニ・リャウであり、たんにオニ（瘟鬼）を意味した可能性が高い。⁽³³⁾平安時代の怨霊の用例から判断すると、怨霊はただちにたんなる失脚者の霊にはならないのである。柳田国男も、『石神問答』のなかで、「蕃神信仰の伝播には古来鉦鼓歌舞の力を仮りし例多し」、「御霊、設楽神の類皆是なり」と述べ、「貞観五年の御霊は冤魂瘡を為すなりとありて、朝家の御仕向御十分ならず、不遇にて物故せし数人の貴族朝臣を神に祭られしやうに候へども、民間にては或は全然之と異なりたる御霊に関する概念を存せしかも知れず候」と指摘し、その書に附載の「現在小祠表」で、御霊の表記のほかに五良・五霊・五郎・御領などと表記される神名を挙げ、政治的失脚者の霊を祭るのは別種の観念が民間にあったことを示唆し、さまざまに表記されるゴリャウあるいはそれに近い音の神々を一応同列において考察の対象とする志向を示していた。⁽³⁴⁾

ところが柳田国男のちに「御霊が五郎に間違ったのには猶仔細がある。……我々の祖先は其中でも若くして不自然に死んだ人のミタマを殊に怖れ」、御霊会という祭りをを行うようになったと述べ、御霊を渡来の蕃神と見なすのは放棄し、御霊の字面のほうに引きずられ、やはりミタマ信仰の延長でゴリャウを考えるようになっている。⁽³⁵⁾

御霊会の祭神を祀ったとされる上御霊神社・下御霊神社はもとは「五霊社」といわれていた。⁽³⁶⁾鎌倉の御霊神社ももとは「五霊社」と称されたし、また現に、国内に御霊神社のほかに五霊神社が多くあり、中には神殿前の石柱には御霊神社と刻しながら、内部には「五霊大権現」の額を掲げる神奈川県葉山町長柄の御霊神社のような例がある。一方中国では、唐代には瘟神の五帝祭祀があり、五帝は五霊ともいわれ、福州では今日でも瘟神を五霊公と称している。

唐代瘟神の五帝は敗軍死将の五人の霊を祀ったものと考えられていたことと日本の疫神を祀る御霊神社がもとは五霊社と称されていたことは、たんなる偶然ではない。とくに、御霊信仰の先蹤をなすとされる『長講仁王般若経会式』で御霊の語が用いられ、そこにある「師比御霊」の師比を鴟尾の当て字であると考えれば、その「御霊」は霊獣としてのゴリャウ（五霊）であり、「崇道天皇御霊等」の「御霊」はまさしく瘟神五帝のゴリャウ（五霊）であろうというのが、筆者の結論である。オニ（瘟鬼）を祓う瘟神の五帝五霊祭祀は中国の民間儀礼に発するものであることがすでに明らかになった以上、列島内部の大陸系の移民社会に伝わっていたゴリャウ（五霊）信仰からいわゆる御霊信仰が生じたとするか、あるいはあくまでも漢字「御霊」の字面にこだわりミタマの御霊から生じたとするか、いずれの説明がより合理的であるかは自ら明らかであると思う。

ゴリャウがもとは「五霊」から出たとしてもなぜあえて御霊という紛らわしい漢字を当てたかについてはなお検討する余地がある。また唐代瘟神の五帝五霊祭祀を証するに足る別の資料を探し出すことが今後の課題として残される。

注

- (1) 山口建治「瘟神の形成と日本におけるその波紋——オニ（鬼）の発生と怨霊・御霊——」、『年報 非文字資料研究』第9号、神奈川大学非文字資料研究センター

- (2) 飯泉健司「御霊信仰の研究史」、『国文学解釈と鑑賞』1998年3月号
- (3) 凡人大伝殆知閣蔵書 <http://wenxian.fanren8.com/>。このサイトは素生がよくわからず、いささか心許ないところがあるが、13000種10万巻の古代テキストを収めるという。引用にあたっては、できるだけ信頼出来る図書テキストにあたって確認するよう努めた。ただ、三種のテキストのみは書籍を見つけ出すの間に合わず、そのまま引用せざるをえなかった。それらの資料は注に明記した。
- (4) 『絵図三教源流搜神大全』、聯経出版事業公司
- (5) 『新編連相搜神広記』、上海古籍出版社刊『絵図三教源流搜神大全（外二種）』所収
- (6) 『女青鬼律』、『正統道蔵』第30冊、新文豊出版
- (7) 山口建治「オニ（於邇）の由来と『讎』」、『文学』2001年11-12号、岩波書店
- (8) 『真誥』、『正統道蔵』第35冊、新文豊出版
- (9) 山口建治「五道神と武塔神」、神奈川大学『人文研究所報』49号
- (10) 菊地章太「洞淵神呪経逐鬼品の救済思想」、東洋大学『東洋学研究』第45号
- (11) 『太上洞淵神呪経』、『正統道蔵』第10冊、新文豊出版
- (12) 『太上正一法文経』、『正統道蔵』第48冊、新文豊出版
- (13) 『道要靈祇神鬼品経』、『正統道蔵』第48冊、新文豊出版
- (14) 正覚『請益録上卷音義』 <http://wenxian.fanren8.com/04/02/648/5.htm>
- (15) 『夷堅志』、夷堅志三補「夢五人列坐」、北京燕山出版社
- (16) 『続集台湾県志』巻五 <http://wenxian.fanren8.com/06/05/230/6.htm>
- (17) 郭白陽『竹間統話』巻二 <http://wenxian.fanren8.com/05/07/277/3.htm>
- (18) 鎌田茂雄他編『大蔵経全解説大事典』、雄山閣出版
- (19) 帛戸梨蜜多羅譯『仏説灌頂経』、大正新脩大蔵経 no 1331
- (20) 守屋美都雄訳注『荆楚歳時記』（東洋文庫 324）、平凡社
- (21) 注（20）と同じ
- (22) 藤善真澄「密教と護国思想」、立川武蔵・頼富本宏編『中国密教』春秋社
- (23) 注（22）と同じ
- (24) 国会図書館蔵『仁王護国般若波羅密多経』訓訳、分身会
- (25) 『密教大辞典』、法蔵館
- (26) 山口建治「武塔神とは何だったか——五道神から武塔神・五頭天王・牛頭天王へ——」、『口承文芸研究』第37号、2014
- (27) 櫻木潤『御霊信仰研究』、国会図書館蔵
- (28) 佐藤道子「地獄と救済」、『アジア遊学』NO.10、勉誠出版
- (29) 坂本要「『鎮魂』語——『鎮魂』語疑義考その2——」、『比較民俗研究』第26号、「怨霊・御霊と『鎮魂』語——鎮魂語疑義考その3——」、『比較民俗研究』第27号
- (30) 石井正己「古典文学基礎百科事典」御霊信仰の項、『別冊国文学』NO.42
- (31) 堀一郎『我が国民間信仰史の研究（二）』、創元新社
- (32) 巖耀中「唐代江南的淫祠與仏教」、『唐研究』第二卷
- (33) 注（1）と同じ
- (34) 柳田國男「石神問答」、『柳田國男全集』1、筑摩書房
- (35) 柳田國男「妹の力」、『柳田國男全集』11、筑摩書房
- (36) 鈴鹿連胤『神社叢録』、思文閣
- (37) 大日本地誌大系十『新編相模風土記稿』、雄山閣